

ミステリー小説と日系アメリカ人 —*Death in Little Tokyo* と *Snakeskin Shamisen* を読む—

佐藤 清人
(山形大学名誉教授)

はじめに

日系アメリカ人三世の作家である Julie Otsuka や Cynthia Kadohata は、一世や二世の作家が伝記や小説で描いた写真花嫁や強制収容の物語をそれぞれ独特な手法を使って語り直した。一方、Dale Furutani や Naomi Hirahara のような日系三世の作家は、強制収容など日系アメリカ人の歴史に言及しながら、ミステリーという様式を使って小説を書いた。ミステリーは謎の殺人事件をめぐる、主人公である探偵が調査を開始し、その謎を解き明かす。しかも、読者の予想を覆すようなどんでん返しがミステリーの醍醐味である。本稿では Furutani の *Death in Little Tokyo* (1996) と Hirahara の *Snakeskin Shamisen* (2006) を読解することによって、その作者たちが強制収容など日系アメリカ人の歴史上極めて深刻なモチーフをどのようにミステリーという物語形式に取り込んだのか検証する。

Dale Furutani の *Death in Little Tokyo*

はじめに Dale Furutani の生涯や経歴について、簡単に振り返っておこう。Furutani は太平洋戦争後間もない1946年にハワイで生まれた。彼はアメリカ本土カリフォルニア州サンペドロで育ち、カリフォルニア州立大学とカリフォルニア大学ロサンゼルス校の両方で学位を得た。卒業後はいくつかの日系企業で働きながら、著作活動を行った。彼の作品は主としてミステリー小説であり、本稿で取り上げる *Death in Little Tokyo* (以下DLTと略) は彼の処女作である。

DLT における物語の展開は以下の通りである。主人公は Ken Tanaka という日系アメリカ人であり、ロサンゼルス・ミステリー・クラブの会員である。このクラブはメンバーの一人がミステリーを創作し、他の会員がそのミステリーの謎解きをして、最も上手く謎を解き明かしたものに賞を与えるというクラブである。そうしたクラブの活動の一環として Ken は「ケンドー探偵事務所；私立探偵ケン・タナカ」という看板を掲げた事務所を借りていた。するとそこに Rita Newly と名乗る女性がやって来て、彼女の代わりにある包みを

受け取ってくれるよう依頼した。報酬は500ドルである。その包みのなかには、彼女がゆすられる羽目になった彼女の写真が入っているとのことであつた。

Ken は包みの持ち主である Susumu Matsuda という男とホテルで会う約束をし、Matsuda から目的の包みを受け取つた。無事に包みを手に入れた Ken だが、翌日 Hansen という名前の刑事の訪問を受け、Matsuda が死体で発見されたことを聞かされる。死の直前に Matsuda と会つていた Ken は殺人の容疑をかけられてしまった。それゆえ、Ken は真犯人を探し出し、自らの潔白を証明しようとする。

Ken のもとには三つの手がかりがあつた。Ken の恋人である Mariko が雇われている Mrs. Kawashiri のブティックには、Mrs. Okada という得意客があつた。彼女の孫 Evan はある新聞社に勤めており、殺人事件に関する情報を引き出すことが可能だつた。Evan から得た情報で、Matsuda の殺人には日本のヤクザが関わつていることがわかつた。二つ目の手がかりは Matsuda から受け取つた包みである。Ken が包みを開くと、それは修理保証請求であり、Rita の写真などではなかつた。さらにそれを横取りすべくやつて来た二人のアジア人から、Ken はそれが拳銃の代金となる請求書であることを知らされた。Rita は日本のヤクザ組織に拳銃を送つたが、それは不良品ばかりだつた。それが露見することを恐れて Rita は、請求書の受け取りに Ken を代理として送り込んだのであつた。また、これによつて Matsuda がヤクザの一味であることも判明した。

三つ目の手がかりは Angela Sanchez という女である。実は Ken が Matsuda とホテルで会つたとき、Matsuda の部屋には Angela がいたのである。しかもそのとき、Angela は自分がストリッパーであることを明かしてつた。Ken は Angela の行方を突き止めようとストリップ劇場を次から次へと訪ね、ついにそれらしき人物がパラダイス・ヴィニヤード・シアターという劇場に所属してつたことを突き止める。だが、Angela はなぜか姿を消してしまつてつた。一方、その劇場の支配人は Fred Yoshida という日系アメリカ人であり、Ken は Yoshida との会話から彼が太平洋戦争のあいだ日系アメリカ人部隊に所属し、訓練中に左足を負傷したことを知る。

そうこうするうちに、Ken はようやく Angela を見つけ出し、Matsuda と Yoshida が戦時中同じ収容所にいたこと、また、50年振りに再会したことを彼女から聞き出した。Ken は博物館で Matsuda と Yoshida が同じ収容所にいた証拠を見つげ出そうとしたが、上手くいかなかつた。ところが、ふたたび Mrs. Okada と話をする機会を持つと、Ken は彼女から重大な話を聞かされた。Matsuda と Yoshida が同じ収容所にいたこと、収容所の日系アメリカ人に対してアメリカへの忠誠と従軍の可否を問う忠誠登録で Matsuda はノー・ノーと答えて拒否したのに対して、Yoshida はイエスと答えて徴兵に応じ、その結果二人は反目し合つたこと、さらに Matsuda の恋人であつた Yoshida の妹 Yuki が何者かに殺されたこと

などである。

これらの情報を基に Ken は Yoshida を問い質すべく彼を訪問すると、ついに Yoshida は真実を告白した。彼の妹 Yuki を殺したのが実は恋人の Matsuda であったこと。Matsuda は Yoshida に謝罪し、土下座もしたが、Yoshida は Matsuda を刀でめった切りにして殺してしまったことなどである。Yoshida は警察に自首することとなり、こうして小説は幕を閉じる。

ヤクザの一味である Matsuda が殺されたが、その原因はヤクザの抗争などではなく、Matsuda の過去における犯罪が絡んでいた。表面的には現代のヤクザの世界、暗黒組織の出来事に見せかけながら、実はそれとはまったく異なる時代、太平洋戦争時の日系アメリカ人社会での出来事が関わっていたという筋立ては、興味深いものである。Furutani は殺人の真犯人が明らかとなる最後の場面で日系アメリカ人の強制収容が重要な意味を持つ伏線として、小説の途中で Mrs. Okada の口を借りて強制収容に関する話を語らせている。Ken が初めて Mrs. Okada と対面したとき、テーブルの上に置かれた一冊の本の写真が Ken の目に留まる。

“Is that book about the Heart Mountain Relocation camp?”

“Concentration camp,” she corrected. “Relocation camp is what they call it now to make themselves feel better. The book is about it. It was in that camp during the war.” (*DLT*, 78)

この後 Mrs. Okada は、強制収容された頃の彼女の思い出を語る so であつた。

Ken は Mrs. Okada の家を辞した後、“Funnily enough, some of the things that Mrs. Okada had told me affected me more than the stuff Evan Okada told me.” (*DLT*, 86) と述べる。続けて Ken は

It was my first personal conversation with someone about the camp experience, even though most of the older Japanese-Americans I know on the mainland must have been in a camp. Most simply don't talk about it. From the books, I knew the recitation of facts about the camps, but hearing that something like boiled squid had been served and nauseam made the experience seem more real. (*DLT*, 86)

と語る。戦後生まれの三世以降の日系アメリカ人のなかには、戦時中の収容所について知らない人々が多い。収容所体験のある一世や二世は自分の子供達にそうした経験をあま

り語ろうとはしなかったからである。Ken が Mrs. Okada に “Why didn’t you talk about the camps?” (*DLT*, 81) と問いかけたとき、Mrs. Okada は “We were embarrassed and ashamed. It was like being in prison, even though we had done nothing.” (*DLT*, 82) と答えた。Mrs. Okada が語る収容所の物語は小説の結末に対する伏線であると前に述べたが、実は、Mrs. Okada の収容所の話がなければ結末が理解できなくなるほど緊密な関係を持っているわけではない。Mrs. Okada の話はそれ自体独立した挿話と見なすことも可能である。

DLT というこの小説はミステリー小説であり、謎解きによって読者の興味を引くことを目的としているが、Furutani にとっては、謎解きという形式だけではなく、謎解きによって明かされる事実もまた重要であった。太平洋戦争が勃発すると、約12万人の日系アメリカ人は全米10箇所に設けられた収容所に収容された。自由を奪われたことそれ自体が不当かつ過酷な出来事であったが、それ以上に日系アメリカ人を苦しめることになったのは収容所生活が始まって約1年後に行われた忠誠登録である。この忠誠登録についても、この小説では Mrs. Okada が語る言葉を通して説明される。

“And Jiro, Fred[Yoshida] was her[Yuki’s] brother?”

“That’s right. He wasn’t at the camp at the time. He had volunteered for the army. He was a yes-yes man.”

“What’s that mean?”

“Oh, in the camps the government wanted us to sign a complicated loyalty oath. For the men, two of the questions on it asked if they would fight for the United States and if they gave up any allegiance to a foreign power. That meant Japan. A lot of the men didn’t like these questions. A huge number were U.S. citizens who thought of themselves as loyal Americans, and they thought it was an insult to say they ever had any allegiance to any country but the U.S. Others felt it was unfair for the U.S. to ask if they would fight when their families were being held in the camps.” (*DLT*, 180)

さらに Mrs. Okada は忠誠登録に Yoshida と Matsuda がどう答えたかも知っていた。

“And Fred Yoshida answered ‘yes’ to both questions?”

“That’s right. That’s why he was a yes-yes man. ...

... “Could you tell me more about Mr. Matsuda?”

“Susumu was a no-no man and a *kibei*.”

“Kibei? That’s a word I’m not familiar with.” (*DLT*, 180-181)

ミステリー小説と日系アメリカ人

アメリカで生まれ育った Yoshida はアメリカに忠誠を誓い、徴兵に応じた。一方、アメリカで生まれながらも、多感な少年期を日本で過ごし、その後アメリカに帰った帰米である Matsuda は日本への忠誠を捨てきれず、徴兵を拒否したのであった。こうした考え方の相違、衝突が Matsuda による Yoshida の妹 Yuki の殺害、また、その復讐としての Yoshida による Matsuda の殺害に至ったことはすでに述べた通りである。

忠誠登録をめぐる対立は日系アメリカ人の歴史上最も重要な問題のひとつであり、それをテーマとして描いた小説としては、日系アメリカ文学の古典とも称される John Okada の *No-No Boy* が存在する。しかし、*DLT* はミステリー小説であり、謎解きに重点を置いているためであろうか、John Okada の *No-No Boy* のように、忠誠登録の対立をめぐる登場人物の置かれていた状況や心情などを精緻に描くことはしていない。Furutani は日系アメリカ人社会の対立や分裂について深く掘り下げることをこの小説の目的とはしなかったと思われる。しかし、すでに見たように、収容所を経験した日系アメリカ人一世、二世の人々は自分たちの子や孫にそうした体験を聞かせることが少なかった。*DLT* のようなミステリー小説はそうした若い世代の人々に収容所をはじめとする日系アメリカ人の歴史に導くきっかけを与えるであろう。*DLT* には読者に謎解きの楽しさを与える一方で、日系アメリカ人の歴史に読者を案内する役割をもっている。

Naomi Hirahara の *Snakeskin Shamisen*

Naomi Hirahara は1962年にカリフォルニア州パサデナで広島出身の両親のもとに生まれた。スタンフォード大学を卒業後、日系新聞の『羅府新報』で記者および編集者として勤務した。その後 Hirahara は日系アメリカ人に関するノンフィクション作品や伝記を執筆し、さらにミステリー作品を多数書き続けてきた。Hirahara の作品にはシリーズ化したものがあり、最も代表的なものは Mas Arai という被爆帰米二世の庭師が探偵として活躍するシリーズである。本稿で取り上げる作品はそうしたシリーズのひとつ、*Snakeskin Shamisen* (以下SSと略)である。この作品はエドガー (アラン・ポー) 賞を受賞し、Hirahara の代表作のひとつと言ってよい。

DLT と同じように、*SS* についても、その物語の紹介から始めよう。小説のなかで生起する出来事と判明する事実を若干の前後はあるが、概ね語られる順番に従って記述する。主人公である Mas Arai は広島で被爆した帰米二世の庭師であり、アメリカの日系人社会で暮らしている。Mas は日系新聞の『羅府新報』誌上で Randy Yamashiro という日系アメリカ人がスロット・マシンで50万ドルのお金を儲けたという記事を読んだ。そして Randy はその

お祝いとして昼食会を開催するという。Mas の友人である Haruo Mukai はその昼食会の招待状をもらっていて、Mas にも参加するよう勧めた。Mas は当初、あまり乗り気ではなかったが、結局は昼食会に出ることにした。すると昼食会で Mas は思いがけない人物に出くわした。Parker 判事である。Mas は何十年も前に庭師として Parker 判事に雇われたことがあったが、庭の色合いを巡って意見が合わず、途中で解雇されたのだった。Parker 判事は今では日系アメリカ人弁護士協会の理事となっていた。

昼食会では余興のひとつとして三味線の演奏が行われた。演奏された曲は沖縄の曲であった。Mas がトイレに立つと、そこで彼は友人であり、日系アメリカ人弁護士協会の理事長をしている G. I. Hasuike と Randy がもみ合っているところに出くわした。二人はベトナム戦争の戦友であったが、何事かをめぐって諍いをしていたのであった。そんな気まずい出来事もあって、Mas は早々に昼食会場のレストランから退散することにした。車に乗って家に戻り、寝入ると、Mas はけたたましい電話の音で起こされた。電話の主は G. I. のガールフレンドで私立探偵をしている Juanita Gushiken という女性であり、警察が Mas にレストランへ戻るよう指示しているとの伝言であった。

レストランでは食事会の主催者である Randy Yamashiro が何者かに殺されており、警察が事件の捜査を始めていた。Mas も警察の尋問を受けたが、とりあえず容疑者となることは免れた。その後、Randy が刀のようなもので頸動脈を切られたこと、また、死体の近くには三味線、しかも三線と呼ばれる沖縄独特の三味線が落ちていたことなどの詳細が明らかとなった。このようにして殺人事件に巻き込まれた Mas は私立探偵の Juanita と共にこの事件の真相を解明すべく聞き込み調査を開始した。

Mas が初めに調査の対象としたのは死体の側においてあった三線である。Mas と Juanita は UCLA の Genessee Howard 教授を最初に訪問した。Howard 教授は沖縄生まれの黒人女性で、沖縄出身の女性とアメリカの軍人との間に生まれた娘であった。Howard 教授からは工工四（くんくんしー）という三線の有名な楽譜が存在すること、しかも、それは行方不明になっていることなどの情報を得た。Mas はその後、Randy の昼食会で三線を演奏し、三線教室の先生をしている Kinjo 親子のもとを訪れた。Kinjo の息子の Alan は殺人事件への関わりを否定したが、父親は死体の側に置かれていた三線が自分のものであること、それは戦時中収容所で購入したものであること、さらにそれが1950年代に盗まれたことなどを話した。

ところで、Mas の知り合いが入所しているケイローと呼ばれる日系アメリカ人の老人介護施設に Gushi-mama と呼ばれる106歳の老婆がいた。彼女は Mas に今回の事件に関する重要ないくつかの情報を提供した。例の三線はやはり Kinjo のものであったこと。Kinjo は昔 Sanjo という兄弟とバンドを組んで演奏していたこと。Sanjo の兄 Isokichi は三線の名

手であり、その腕前は Kinjo を遙かに凌ぐものであったこと。Kinjo は自分の三線がバンドの誰かに盗まれたと言っていたこと。さらに Isokichi Sanjo はアカ、すなわち共産主義者と見なされていたことなどが明かされる。Mas は不意に Sanjo という名前が漢字でどう書かれるのか知りたくなり、Gushi-mama に尋ねると、それは「山城」であることが分かった。「山城」は Sanjo と読まれる一方、Yamashiro とも読まれる。Juanita は、Isokichi Sanjo が1953年に亡くなったこと、同じ年に Randy Yamashiro とその弟 Brian が母親とともにハワイに移住したこと、Randy のミドルネームが Isokichi であることなどから Isokichi Sanjo と Randy Yamashiro が親子であることなどを突き止めた。

一方、Juanita は Isokichi が1953年に撲殺されていたことを調べ上げた。さらに Howard 教授は Isokichi が共産党とのつながりで逮捕されたこと、また、その弁護にあたったのが Parker 判事であったことを突き止めた。しかし、Parker 弁護士は、Isokichi は共産党の集会に一度出席しただけで、決して共産黨員などではなかったと証言し、誰が Isokichi を殺したかは分からないと言った。また、Isokichi の死後、殺人事件の現場に置かれていた三線は警察から Parker に渡され、以後ずっと彼がその三線を所有していた。そして、昼食会の前日 Parker 判事は Randy からの電話で、その三線を返してくれるよう要求され、Randy に渡したのであった。

Parker 判事はさらに Isokichi と共産党に関する情報を彼に提供したのが Kinjo であることも明らかにした。Mas が直接 Kinjo に問い質す場面は以下の通りである。

Mas felt a sense of calm wash over him. Maybe it had been the music that made him feel stronger. He wasn't going to leave unless Kinjo explained what exactly he had done to Sanjo in the fifties.

Mas decided, as Tug would say, to go for broke. He thought of the worst thing a man could call another man--a dog, informant, a back stabber. "You *inu*," Mas stated.

"Who are you calling *inu*?"

"You tellsu INS dat Sanjo *aka*. I knowsu. Judge Parker tell me."

"Sanjo was *aka*. I saw him myself at that meeting."

"Then youzu *aka* too. Whysu you at the meeting in the first place?"

Kinjo's face looked frozen again, as if he were stuck in the past and couldn't move forward.

"You make deal with government, *desho*? You finger Sanjo, and then you free."

Mas kept going. "But Sanjo neva come back after they get him. He found dead at coroner's. And now his son dead too." (SS, 150-151)

Sanjo は Kinjo の密告によって逮捕され、Parker 判事がその弁護を引き受けたのであった。

ところで、三線について Isokichi の弟である Anmen が新たな証言をした。Isokichi は Kinjo の持っている三線の棹に工工四が隠してあることを知り、Kinjo が沖縄政府からそれを盗み出したのだと告発した。さらに、その三線を自慢する Kinjo の態度に常々うんざりしていた Isokichi は、その三線を盗んだ。一方、その仕返しに Kinjo は Isokichi を共産党との関わりで密告した。Isokichi が殺された後、赤狩りで身の危険を感じた Anmen は Isokichi の妻とその子供たちの名前を Yamashiro に変え、ハワイに移住するよう促し、自らも名前を変えたのだった。

一方、昼食会で Kinjo とそのバンドが三線を演奏したとき、それを企画したのが Randy Yamashiro 本人であることが分かった。また、三線についてはさらなる真相が判明する。Kinjo の三線の教室には Halbertson という人物がいた。彼は太平洋戦争中沖縄戦に従軍し、そのとき沖縄の文化に魅せられた。Halbertson は戦争が終結する前に本国に戻り、日系アメリカ人の収容所で働いた。するとそこで彼は Kinjo と知り合った。Kinjo が盗んだものと思われていた三線は、実はこの Halbertson が沖縄で盗んだものであり、それを Kinjo が50ドルで買ったのだった。

Kinjo は殺された Randy が逆に自分を殺そうとしていたのだと述べた。食事会で演奏が終わった後、三線を手に持った Randy が Kinjo にその三線に見覚えがあるかどうか問い質した。Kinjo が Isokichi を殺したと思いこんでいた Randy はその後、父の敵討ちだと言って Kinjo にナイフで切りつけた。そのとき、G. I. や Randy の戦友である Jiro Hamada が突然姿を現し、Randy のナイフを取り上げると、逆にそのナイフが Randy の首に食い込んだ。Jiro は自分が Randy から Kinjo の命を救ってあげたのだから、Kinjo は自分に借りができたと言い、このことを誰にも喋らないよう命じた。Jiro もその後殺人現場から姿を消したが、その様子を見ていた者がいた。それは Isokichi の弟 Anmen であった。

その後、Anmen が Jiro を人質にとり、Jiro の家に立てこもった。Anmen は甥の Randy を殺害した Jiro を人質にして復讐しようとしたのである。すると Mas が Anmen の説得に当たることになり、Mas は殺人を計画したのは Randy の方で、Randy は Kinjo を殺して父親の復讐をするつもりだったことを Anmen に説明した。Anmen に Isokichi という兄弟がいたように、Randy が死んでも、その兄弟である Brian が生きていることを Mas が Anmen に思い出させて兄弟の情に訴えると、Anmen は人質を解放することに同意した。

Randy 殺害の犯人はわかったが、Isokichi 殺害の犯人は依然として不明であった。Mas は以前から真犯人と疑っていた Parker 判事のもとを訪ね、単刀直入に尋ねた。

“But you kill him anyways.”

“I didn’t necessarily want him dead, Mas. I wanted him to go forward with the trial. But he was a coward. And then his brother fired me. Neither of them realized what was at stake. Our government had abandoned the Constitution; his case could have helped others. But he had given up. I was mad--hell, I was mad. I had every right to be. I had spent hours on that case.”

“So, Mas, you ask why I killed Isokichi Sanjo. Well, whatever I may have done, I’ll have God contend with. But believe me, Sanjo did much worse. He wasn’t thinking beyond himself. If he took a stand, he might have stopped the purging, or at least slowed it down. ...” (SS, 246-247)

Parker は日系人たちを赤狩りから守るために尽力しようとしたが、Isokichi に協力を拒まれ、その結果 Isokichi を殺害したというのが真相であった。Parker は Isokichi の殺害事件に関わる他の日系人 (Kinjo) が自分に不利になるような証言をすることはなく、自分が有罪になる可能性はないと確信していた。しかし、Mas と Parker とのやり取りは Mas が密かに胸に忍ばせていたマイクを使って警察の捜査官に伝わっていた。Parker はやがて起訴され、有罪となるであろう。一方、Randy を殺した Jiro はすでに保釈され、また、Anmen も早晚保釈される見通しとなり、物語は結末を迎える。

物語の展開に即して生起する出来事と判明する事実をこれまで縷々述べてきた。しかし、このミステリーに登場する人物関係や出来事の因果関係を、はたして読者は即座に理解できるであろうか。Furutani の *DLT* の場合には物語の展開は明快で、ミステリーの謎が解かれる際のどんでん返しも読者になるほどと納得させるものがある。しかし Hirahara の *SS* にはそのような明快さはない。Randy Yamashiro が殺され、その犯人探しが行われた結果、G. I. の戦友である Jiro Hamada が偶然 Randy を殺害するはめとなったことが判明する。こうした真相の解明は読者にどのような印象を与えるだろうか。やはりと納得するだろうか、はたまた、その意外性に驚くだろうか。おそらくそのどちらでもなく、読者はこうした結末に対して拍子抜けしてしまうように思われる。なぜなら、Jiro が Randy を殺害したのは偶然であり、そこには確たる動機は存在せず、しかもそのせいか、Jiro は逮捕されて間もなく保釈されてしまうからである。

SS の読後感には何か釈然としないものがある。その理由を探るために、もう一度時間を巻き戻して、この小説の物語を時間軸に沿って因果関係を中心に以下に語り直してみよう。1930年代 Isokichi Sanjo と Kinjo は共産党の集会に出入りしたことがあった。時は太平洋戦争に移る。太平洋戦争時 Halbertson は沖縄戦に従軍したときに沖縄の文化に魅せら

れ、その混乱に乗じて国宝の三線を盗み出した。しかし、彼はその三線の価値を知らなかった。その後彼はアメリカに戻って日系アメリカ人の収容所で働いた。その収容所には Kinjo が入所しており、Kinjo は Halbertson から三線を50ドルで購入した。そして時代は1950年代に移る。Kinjo と Sanjo は共に沖縄生まれの三線奏者であり、同じバンドで演奏していた。Sanjo は三線の名人であったが、Kinjo の腕前は Sanjo に比べると劣っていた。しかし Kinjo は国宝級の三線を持っており、それを常々自慢していた。そうした態度を苦々しく思っていた Sanjo は Kinjo の三線を盗み出した。Kinjo は三線を盗んだ犯人が Sanjo だと推測し、その仕返しにかつて共産党の集会に出入りしていた Sanjo を共産党員として政府に密告した。Sanjo の弁護士となった Parker 判事は Sanjo の無罪を勝ち取り、さらに国外追放されかねない他の日系アメリカ人のために尽力するつもりであった。しかし Parker 判事は弁護の途中で解雇され、彼は目的を果たせずに終わった。その腹いせに Parker は Sanjo を殺害した。Kinjo はそうした事件の真相を知っていたが、Parker から口止めされ、犯人は不明のまま迷宮入りとなった。また、Sanjo がもっていた三線はそのとき Parker 判事に渡され、以後彼が所有することとなった。

一方、Isokichi が共産主義者として密告されたことにより、家族である自分たちの身の危険を感じた Isokichi の弟 Anmen は Isokichi の妻と二人の子供の名字を Sanjo から Yamashiro に変え、ハワイに移住させた。その後、家族は平穏な生活を続け、やがてアメリカ本土に戻った。そして時代は小説の冒頭へと移る。Randy はスロット・マシンで50万ドルを儲け、食事会を開催することにした。それを知った Anmen はしばらく音信不通であったが、甥の Randy と連絡をとり、父の Isokichi の死に Kinjo が関わっていることを Randy に教えた。Randy は父の復讐をすべく、Kinjo のバンドを食事会に呼び、また、Parker には三線を持ってくるように要求した。Randy は三線を Kinjo に見せて Isokichi の死に関する真実を聞き出し、また Kinjo に復讐するつもりであったが、Jiro に阻まれ、逆に殺される結果となった。Jiro は殺害現場に居合わせた Kinjo に真実を口外しないよう口止めしたが、殺人現場を目撃していた Anmen によって人質にとられ、Jiro が殺人犯であったことが暴露され、逮捕される。しかし、偶然殺人者となった Jiro はその後保釈される。一方、Isokichi を殺した犯人の Parker 判事は Mas に疑惑を向けられ、ついに彼が Isokichi を殺害したことを告白する。その会話の内容は密かに警察に漏れていたことから Parker 判事はやがて逮捕され、有罪になることが暗示されて物語は終わる。

物語の出来事をさらに整理しよう。SS では二つの殺人事件が起こる。Randy の殺害と Isokichi の殺害である。改めてこの二つの殺人事件を比較してみると、Randy の殺害事件は、迷宮入りとなっていた50年前の Isokichi の殺人事件を掘り起こす役割を果たしていることが分かる。この小説の核となる殺人事件は、Randy の殺害ではなく、実は、Isokichi の

殺人事件の方なのである。そしてその事件には政治的な問題が絡んでいた。すなわち、1950年代に吹き荒れた赤狩りの運動との関係である。Isokichi は共産主義の集会に参加した程度で実際には共産主義者ではなかったが、彼に嫉妬し、恨みを抱いていた Kinjo が密告した。Parker 判事は自分の名声を高めるために Isokichi の弁護を引き受けたが、早々に解雇されてしまい、彼の目論見は頓挫してしまう。それどころか、逆に Isokichi を殺害してしまったのである。この事件こそが *SS* の物語の核心である。

一方、Randy の殺人現場に置かれていた三線についてであるが、Halbertson が戦時中沖縄戦に従軍したときに沖縄政府から盗み出して以来、Kinjo、Sanjo、Parker 判事と持ち主が変わっていくが、そのことは Isokichi の殺人と関わっているわけではない。一見、殺人事件の鍵であるように見えながら、実はそうではなかった。Furutani の *DLT* でも、事件の真相がヤクザ社会の抗争のように見せかけながら、実は戦時中の収容所における忠誠登録に関わっていたように、*SS* においては、Isokichi の殺人事件の真相が三線に関わっているように見せかけながら、実は、赤狩りと関わっていたのであり、三線は真相から読者の目をそらすための道具として機能していたことが分かる。*SS* は読者が一読して理解できる物語ではない。筆者がここで試みたように、物語を構築し直さねばならない。断片的な証言が複雑に絡み合うこの物語は、それ自体が謎であり、その謎を解き明かす必要があるのだ。

ところで、*DLT* は忠誠登録という歴史的な出来事を踏まえ、事実を基にして作られたフィクションであった。忠誠登録については作品の中でもその説明はなされており、読者の理解を妨げるものはない。一方、*SS* における日系アメリカ人と共産主義との関係については、一般に知る人は少ない。*SS* の文中でも Sanjo と共産主義との関係が判明する件で、一つの疑問が呈せられている。1950年代の移民を保護する委員会の資料のなかから Isokichi Sanjo の書いた手紙を発見した Howard 教授は次のように言い、また、それを受けて語り手は疑問を呈する。

“I guess he was among immigrants arrested for their affiliations with the Communist Party in the thirties.”

Communists--*aka*, that's what Gushi-mama had told them. But it didn't make sense. If the letter was dated 1953, what did that have to do with something from the thirties? (*SS*, 137)

Howard 教授の言葉を受けて Gushi-mama が次のように言う。

“It was the height of the Red scare. The McCarran-Walter Act enabled the government to deport ‘undesirable’ aliens, which was open to interpretation, let me tell you. Some of the deported had even fought for the Allied Forces during World War Two. But on the flip side, the act was the same legislation that allowed Issei to finally get naturalized. So most Japanese Americans view it as being beneficial.” (SS, 137-138)

1930年代に共産党と関わっていた Sanjo がなぜ1953年に逮捕されたのか、Howard 教授は不思議に思う。Gushi-mama はそれに答えるように、マッカラン=ウォルター法の存在を持ち出すが、読者には俄には理解し難いだろう。この点については、1952年に施行されたマッカラン=ウォルター法とその当時の日系アメリカ人の社会について書いた南川の論説を参照しよう。南川はこの法律によって1930年代に共産党員の集会に参加した日系人が検挙され、日本に送還された事例を紹介し、1950年代の反共産主義の体制のもとで、太平洋戦争時に強制収容を経験した日系人が今度は強制送還の脅威にさらされていた状況を記述している(南川、154)。つまり、Sanjo と Kinjo は1930年代に共産党の会合に出席した過去があり、マッカラン=ウォルター法施行後に Kinjo は Sanjo を密告したのである。

SS は DLT に較べて登場人物も多数であり、また、その関係も複雑である。さらに、Mas が事件解明のために証言をもとめても、Kinjo や Parker のように後に真実を告白するものの、最初は偽の証言をする人物もいる。こうした要因が重なって、この作品は読者が一読しただけでは理解が難しい作品となっている。SS の二つの殺人事件の犯人は解明されるが、それによってこの小説の内容が読者に理解されるというわけではない。DLT は読者に明快な謎解きを提示しており、読者は物語の展開を容易に理解する。一方、SS は読者に対して読解を阻む仕掛けを用意しており、読者はそうした障害物を取り除く積極的な読解を要求されるのである。

おわりに

本稿では Dale Furutani と Naomi Hirahara が日系アメリカ人の歴史に関わる出来事や事件を彼らのミステリー小説のなかでどのように展開させたのかを解説してきた。ところで、日系アメリカ人の歴史とミステリー小説は本稿の2つの柱であるが、これまでの記述のなかでミステリー小説というジャンルに関する議論はあまりしてこなかった。本稿で取り上げた2つの作品はどちらも日系アメリカ人の素人探偵が主人公であり、彼らが殺人事件について

地道に聞き込みや資料の調査を続けていく結果、事件の真相の解明および真犯人の発見という結末にたどり着く。多くの読者はミステリー小説といえ、Sherlock Holmes や Hercule Poirot のような人並み外れた知力と洞察力を持った名探偵が、極めて難解な事件を解決する物語を思い浮かべるに違いない。しかし、Ken Tanaka や Mas Arai は明らかに Holmes や Poirot とは異なる。Furutani と Hirahara のミステリーが Conan Doyle や Agatha Christie の小説とどう違うのか、また、日系アメリカ人作家のミステリーがミステリー小説全体の中でどう位置付けられるのかという問題も興味深いところである。しかしながら、こうした問題は本稿の目的を超えるものであり、ここで論じることは控え、今後の課題としたいと思う。

ただし、Doyle や Christie の作品と較べた場合に明らかとなる顕著な点を一つだけ指摘しておこう。Furutani と Hirahara のミステリーで起こる殺人事件には、殺人犯が自分の犯罪を隠蔽するような巧妙なトリックが出てくるわけではなく、また、主人公が真犯人の発見にいたる過程においても、主人公が読者を驚嘆させるような鋭い観察力や洞察力を示すわけでもない。あくまでも地道な聞き込みと調査が事件を解明する鍵となっている。Doyle や Christie の小説は、どのような事件が起きたかということよりも、探偵としての主人公の天才的な手腕を示すことを優先させているように思われる。Sherlock Holmes や Hercule Poirot が名探偵であることは広く知られているが、彼らが解決した事件そのものの内容を覚えている読者は少ないかもしれない。一方、Hirahara の場合には、Mas を名探偵に見せかけようとする傾向が少なからず見られるとはいえ、読者が Mas に対して抱く印象は Holmes のそれからは大きく隔たっている。Furutani の Ken もまたおよそ名探偵と呼べるほどの鋭い能力を発揮するわけではない。Furutani も Hirahara も主人公の探偵としての才能や力量よりも、物語内で生起する出来事に読者の関心を引き寄せようとしている。ミステリーという大衆的な物語形式を通して、日系アメリカ人の歴史における出来事や事件を広く知らしめることが、Furutani と Hirahara それぞれの作家の狙いであったと思われる。

[謝 辞]

本研究は、JSPS 科研費 JP20K00382（研究題目：日系アメリカ人三世が描く「強制収容」物語）の助成を受けたものである。

参考文献

- Furutani, Dale. *Death in Little Tokyo*. New York: St. Martin's Press, 1996. Print.
- Hirahara, Naomi. *Snakeskin Shamisen*. New York: Delta Trade Paperbacks, 2006. Print.
- Kadohata, Cynthia. *Weedflower*. New York: Simon & Schuster, 2006. Print.
- Okada, John. 1957. *No-No Boy*. Seattle: U of Washington P, 1979. Print.
- Otsuka, Julie. *When the Emperor Was Divine*. New York: Knopf, 2002. Print.
- 和泉真澄「「天賦人權」から「忠誠の報酬」へ — 「強制収容法」に見るマッカーシー時代の市民的自由 —」『立命館言語文化研究』16巻4号, 2005: 15-28.
- ジョン・オカダ『ノー・ノー・ボーイ』中山容（訳）晶文社 1979年
- ジョン・オカダ『ノー・ノー・ボーイ』川井龍介（訳）旬報社 2016年
- ジュリー・オーツカ『天皇が神だったころ』近藤麻里子（訳）アーティストハウス2002年
- ナオミ・ヒラハラ『スネークスキン三味線』富永和子（訳）小学館文庫 2008年
- デイル・フルタニ『ミステリー・クラブ事件簿』戸田裕之（訳）集英社文庫 1998年
- 佐藤清人「断片的な物語 — Julie Otsuka の小説 —」『山形大学人文社会科学部研究年報』第18号, 2021: 75-87.
- 佐藤清人「*Journey to Topaz* と *Weedflower* — ヨシコ・ウチダとシンシア・カドハタの比較研究 —」『山形大学紀要（人文科学）』第20巻第1号, 2022: 1-17.
- 田村紀雄「新聞『階級戦』と劔持貞一 — 1920年代サンフランシスコ・日本町」『東京経済大学人文自然科学論集』122号, 2006: 57-75.
- 南川文里「ポスト占領期における日米間の移民とその管理 — 人の移動の1952年体制と在米日系人社会」『立命館国際研究』28巻1号, 2015: 145-161.
- 山口知子「大衆文学 — 「越境」のみえる場所」山本秀行、村山瑞穂（編）『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』世界思想社 2011年

Mysteries and Japanese American Writers — Reading *Death in Little Tokyo* and *Snakeskin Shamisen* —

SATO Kiyoto

Many Japanese American writers have written autobiographies and novels to present the lives of Japanese American people interned in the camps during the Pacific War. But some authors also made mysteries by mentioning the political events of Japanese Americans (including the internment). Mystery is a fiction genre where the cause of an event, usually a murder or other crime, remains unresolved until the end of the story. The central character is often a detective, who eventually solves the mystery by investigating the people concerned with the event and identifying the criminal. Two mysteries by Dale Furutani and Naomi Hirahara, *Death in Little Tokyo* and *Snakeskin Shamisen* largely follow the pattern of mystery. In this paper I will examine how the two mysteries are unfolded around the historical and political events in the Japanese American society: the internment and the Red Scare.